

日本・スイス国交樹立160周年

「Imagine Switzerland」 時計がつなぐ日本とスイス

はじめに

2024年、日本とスイスは国交樹立160周年を迎えました。両国の絆には時計が大きく関わっています。

1863年、スイス時計製造業者連盟会長のエメ・アンベールはスイス使節団の団長として来日し、約10か月間にわたり日本に滞在しました。スイス製の時計が日本との交易の鍵を握ると考えた彼は、徳川幕府と交渉を重ねながら、江戸湾沿いの地域を旅して市場調査を行いました。困難の末、1864年2月6日に日本とスイスは国交を樹立。それから160年を経た今日では、スイスは「時計王国」として日本人の間浸透し、スイス製の時計は高い人気を誇っています。

このパネル展示ではスイス使節団の足跡を辿り、また、当時の日本の時計事情をご紹介します。



エメ・アンベール 特命全権公使 /
スイス時計製造業者連盟会長

スイス時計協会 FH 東京センター

Fédération de l'industrie horlogère suisse FH

後援：在日スイス大使館 / スイス政府観光局 / 一般社団法人 日本時計輸入協会
 協力：公益社団法人 OAG ドイツ東洋文化研究協会 / 一般社団法人 日本時計協会 /
 セイコーミュージアム 銀座 / 財務省統計局 / 国立国会図書館 / 外務省外交史料館 アジア歴史資料センター /
 東京大学史料編纂所 保谷 徹 / 長崎大学附属図書館 / 株式会社雄松堂出版 (順不同)
 オーデマ ピゲ ジャパン株式会社 / LVMH ウォッチ・ジュエリー ジャパン株式会社 /
 ソーウインド ジャパン株式会社 / スウォッチ グループ ジャパン株式会社 (ABC 順)
 大川 展功 / 栄光時計株式会社 代表取締役会長 小谷 年司 /
 ヌーシャテル民族誌学博物館 (Musée d'ethnographie de Neuchâtel) /
 ヌーシャテル大学 (Université de Neuchâtel) / ヌーシャテル観光局 (Tourisme neuchâtelois) /
 ヌーシャテル・パブリック・ユニバーシティ (Bibliothèque publique et universitaire Neuchâtel) /
 ヌーシャテル図書館 (Neuchâtel Library) / スイス・フェデラル・アーカイブス (Archives fédérales suisses) /
 ラ・ショー・ド・フォン図書館 (Bibliothèque de la ville de LaChaux-de-Fonds) /
 ラ・ショー・ド・フォン歴史博物館 (Musée d'histoire La Chaux-de-Fonds) (順不同)
 写真：小野 静穂
 オリジナル版 (2015年製作) 監修：瀧澤 広 (時計ジャーナリスト / 2021年5月27日没)
 改訂版 (2024年製作) 制作・編集：スイス時計協会 FH 東京センター、高井 智世
 デザイン：野呂 麻美



エメ・アンベール 特命全権公使とその一行

精密機械工業や時計製造で名高いスイス・ヌーシャテル州で、エメ・アンベールは1819年に誕生した。成人後の彼は教員の資格を取得する一方で、政治活動に身を投じ、第三次産業へも関心を向けた。1858年には創設されたばかりの時計製造業者連盟の会長に就任。その重要な任務は、時計市場の開拓だった。

1859年にスイス政府は日本との通商交渉を始めるべく、同連盟のルドルフ・リンダウを一個人として日本に派遣するも交渉は進まなかった。日本との交易を重要視していたアンベールはスイス政界や経済界の代表者たちに向け、通商条約締結を目的とした公式な使節団の派遣を要請した。そして1861年5月17日、スイス連邦議会はアンベールを代表とした使節団の派遣を決定したのである。



エメ・アンベール
(Aimé Humbert-Droz 1819~1900)
ヌーシャテル図書館所蔵。



エメ・アンベール使節団。ベルンの連邦議会の宮殿テラスにて。左から右の順に、ル・ロツクルの時計製造業者、ジェームズ・ファブル・ブラント、チューリヒ州のカスパー・ブレンワルド、中央の椅子に座っているのがエメ・アンベール本人、商人のエドワルド・バフィール、ツーク州出身の技術者、イワン・カイザー、シャフハウゼン州のヨン・ブリングルフ少佐。ラ・ショー・ド・フォン図書館所蔵。



エメ・アンベールが帰国後の1870年に出版した“Le Japon Illustré” (邦題『アンベール幕末日本図絵』)。日瑞修好通商条約締結のため1863年4月から約10か月間滞在した日本で、歴史や文化、宗教、天皇制度や当時の江戸の人々の暮らしに至るまで、あらゆる分野に視点を注いだアンベールの著書。フランス・パリ/アシェット出版社。



アンベールが特命全権公使に任命された頃のラ・ショー・ド・フォンの街並み。ラ・ショー・ド・フォン歴史博物館所蔵。

派遣に至るまでの経緯

使節団の派遣が承認されるとすぐに、アンベールは日本駐在のオランダ領事館に日本との交渉の仲介を依頼するため、出発前の1862年8月にスイス・オランダ協定を締結させた。一方、スイス連邦政府が計上した10万スイスフランでは派遣費用の一部しか賄えないため、アンベールはヌーシャテル州の時計製造業者やチューリヒ州の絹織物業者を説得し、費用を集めた。最終的に政府はアンベールを使節団の特命全権公使として、またチューリヒ州のカスパー・ブレンワルドを公使および通商担当代表者の書記官に任命し、さらに4名の専門随行員を決定した。晴れて1862年11月18日、オランダの力強い後押しを得たアンベール使節団一行は、フランス・マルセユから船で日本を目指すことになったのである。5か月に及ぶ長い航海が始まった。



「ジュネーヴ州、ジュネーヴ委員会の遣日スイス使節団に関する意見書」(1861年/左)と、「スイス連邦参事会と日本国将軍の間における修好通商条約」(1864年2月6日調印/右)。スイス・フェデラル・アーカイブス所蔵。

危険と背中合わせで始まった 日瑞通商修好条約

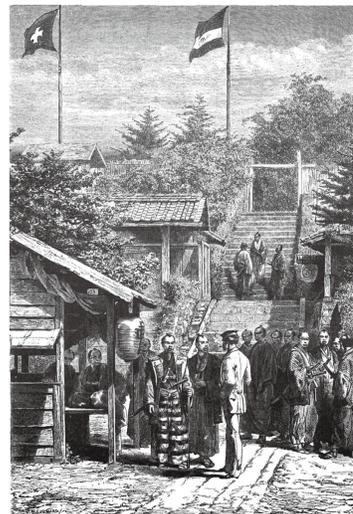
アンペール使節団が来日した1860年代の幕府を取り巻く情勢は、攘夷運動や生麦事件が象徴するような混迷の時代であり、条約を締結させるには多くの苦難を伴った。

幕府は1858年の日米修好通商条約締結を皮切りに、併せて4か国との条約締結を推し進めていた。

しかし右の幕末年表が示すように、当時の江戸の情勢は外国人への襲撃が頻繁に起きるなど、条約締結のための交渉は簡単ではなかったことがわかる。

幕末の混迷期に来訪したエメ・アンペール使節団

1641年	平戸のオランダ商館を長崎出島に移す（鎖国の完成）
1853年	アメリカの東インド艦隊司令長官のペリー、浦賀に来航
1854年	日米和親条約（神奈川条約）調印
1858年	日米修好通商条約調印／安政の五か国条約 安政の大獄（1858年～1859年）
1859年	スイス通商関税局代表としてルドルフ・リンダウが来日
1860年	桜田門外の変
1861年	米国公使館書記官、ヒュースケンが暗殺される。攘夷主義は外国人への襲撃事件に発展 日独修好通商条約調印 スイス連邦政府は日本へ条約締結のための使節を派遣することを決定し、10万スイスフランの予算を計上 水戸浪士ら東禅寺の英国公使館襲撃事件（第一次） スイスにおいてエメ・アンペール一行が使節団に任命される（8月）
1862年	英国公使館襲撃事件 生麦事件
1863年	高杉晋作ら長州藩士が、御殿山の英国公使館を焼き討ち アンペール使節団がオランダ軍艦メデューサ号で横浜に到着（4月26日） アンペールらはオランダ軍艦メデューサ号で江戸に到着し、オランダ領事館の長応寺に入る（5月28日） 下関戦争（長州藩が下関で外国商船を砲撃） アンペール使節団、12日間の江戸滞在（6月8日） 薩英戦争
1864年	横浜にて条約締結交渉を開催し、合計3回の交渉で条約本文が確定（1月26日） アンペール使節団、長応寺にて条約を締結（2月6日）
1867年	大政奉還



オランダ領事館が駐在していた江戸の長応寺（現在の東京都港区）。使節団はここに滞在して幕府と交渉する予定だったが、当時の江戸は常に幕府の護衛が必要なほど外国人にとって危険な状況だったため、横浜で待機することになった。フェリーチェ・ベアート（1863年）長崎大学附属図書館所蔵。右の上下2枚はF・ベアートの写真をもとに描いた絵だが、面白いことに後方の国旗が異なっている。即ち、写真では存在しなかったスイス国旗が、何らかの意図があって、オランダ国旗の右側に新たに描かれたと思われる。『アンペール幕末日本図絵』（雄松堂出版）

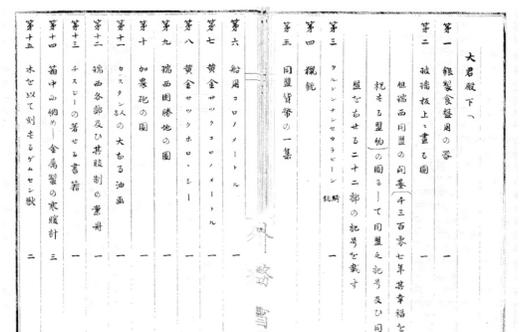


幕府は使節団一行の安全のため、外出の際は護衛と共に行動するように、また夜は幕府軍艦エンペラー号で過ごす旨を命じた。右は護衛の様子を捉えた写真。F・ベアート（1863年）長崎大学附属図書館所蔵。上は、右の写真をもとに描いた絵“江戸市中散策”チャールズ・ワーグマン（1863年）、24.4cmx 32.1cm。ヌーシャテル民族誌学博物館所蔵。



スイス政府からの贈り物

スイス連邦政府が使節団の派遣費用として計上した10万スイスフラン（当時の通商関税局の年度予算は5000スイスフラン）のうち、4万スイスフランは幕府への寄贈品代であった。連邦政府はできるだけ出費を抑えるべく、国内の各州の時計や繊維業界から寄付を募った。その結果、将軍や大奥には“船舶用コロノメートル”（船舶用クロノメーター）、“金の袂時計”（金の懐中時計）、“ジアマン（ダイヤモンド）で（ケースの）縁を飾り、黄金の鎖を具せる（備えた）袂時計”などの品々が献上された。これにより大幅な予算が削減できたと言われている。



“条約／瑞西条約一件四、続通信全覽類輯之部修好187”、外務省外交史料館JACAR所蔵 Ref.B13090291800。

アンベール使節団の 心に残った 幕末日本のくらし

条約の交渉を進める一方で、アンベールは日本がスイス時計の市場となり得るか否かを調査した。しかし当時の日本ではスイスと異なる時刻制度が使われており、また庶民の生活は決して豊かではなく、一般の人々がスイス時計を買える状況ではなかった。

アンベール一行は滞在していた約10か月の間に、江戸湾に沿った各地を旅して、庶民の様子を観察し、克明に記録した。書籍市で手に入れた町の建築物や情景などの版画や水彩画、あるいは当時横浜に在住していたイタリア人写真家、フェリーチェ・ベアートが撮影した鶏卵紙の写真などを数多くスイスに持ち帰り、後に出版する『アンベール幕末日本図絵』(原題“Le Japon illustré”/日本語版:高橋邦太郎 訳、1969年雄松堂書店(当時)の挿絵の参考画像とした。



アンベール使節団が滞在していた当時の日本では、日本独自の和時計が大名や豪商によって使用されていた。江戸時代から日本でも時計師の仕事が確立されたとされる。彼らは定時法を刻む西洋の時計を調べて改造し、不定時法に合わせた和時計を作り上げた。上の写真と錦絵に見られるのは、鐘楼や火の見櫓に似た形の台座に時計を載せた、「櫓時計」と呼ばれた和時計。

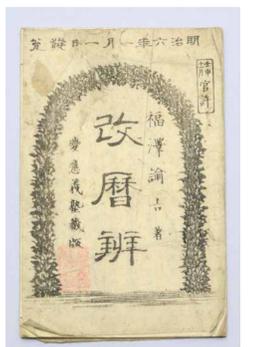
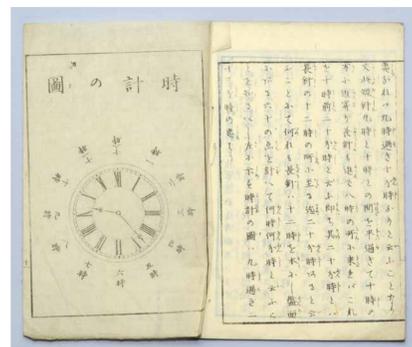


上の画は、日本の絵画をいくつか組み合わせた『アンベール幕末日本図絵』の挿絵の一部。もともと別の素描だったふたりの曲芸師などが描かれている。上/「軽業師と刀呑みの曲芸師」(L・クレポン画)。下/(左)「驚くべき宙帰り曲芸師」(右)「刀を呑み込む曲芸師」(いずれも作者・年代不詳)。ヌーシャテル民族誌学博物館所蔵。

新暦と旧暦—新しい暦と時刻表示

明治維新以後、近代国家を目指す政府は廃藩置県、戸籍法の制定、斬髮廃刀(散髮脱刀)令の発布、徴兵制度の施行、さらに鉄道の開業などを実施したが、この一連の変革の中には改暦があった。即ち、それまで使われていた月の動きに基づいた「太陰暦(正確には太陽太陰暦)」から、太陽の動きを基にした「太陽暦」へと変更されたのである。一般には旧暦と新暦として理解されているが、前者は1872(明治5)年12月2日まで使われており、新しいグレゴリオ新暦はその翌日の12月3日をもって1873(明治6)年1月1日とした。

これと同時に時刻表示も刷新された。こちらは昼と夜の長さが季節で異なる「不定時法」に替わり、1日を均等に24時間割りした現代の「定時法」が採用となった。これら新旧の違いは福澤諭吉の筆になる『改暦辨』にも著された。



旧暦から新暦へ。 日本の新たな幕開けを支えた スイス時計

アンベール使節団のカスパー・ブレンワルドやジェームズ・ファブル・ブラントらはアンベールの帰国後も日本に残り、横浜の外国人居留地で貿易商館を興した。一方、一足先に来日していたルドルフ・リンダウ先遣隊の一員であったフランソワ・ペルゴは、日本人の嗜好を製品に反映させた懐中時計を広めることに成功。それ以後、各商館はペルゴが選んだ時計を踏襲した製品をロンジン、ゼニス、オメガ等のメーカーに発注し、日本で販売した。



19世紀のスイスの時計工房を描いた絵画。照明が発達していなかった当時、時計師たちは窓に向かって作業を行っていた。左はギュスターヴ・ジャンヌレ画。ヌーシャテル大学所蔵。右はフリッツ・ツバービューラー画。国際時計博物館所蔵。



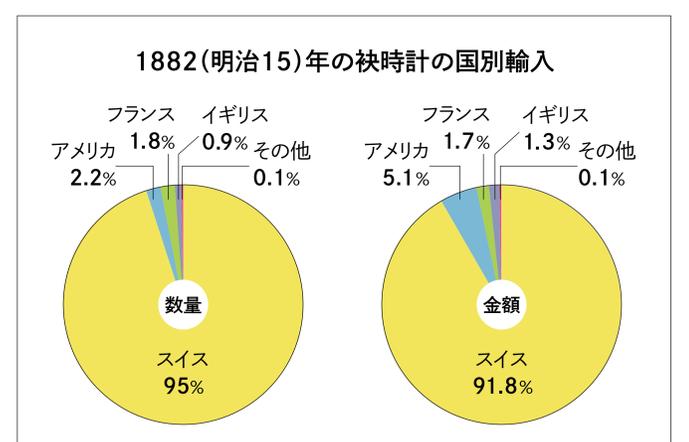
外国商館を通じて日本に輸入された時計を「商館時計」と呼ぶ。日本では白のエナメル文字盤に細いローマン数字のインデックス、そして上品な針がついた銀時計が好まれた。左上/幕末期に渡来した懐中時計。右はフランソワ・ペルゴが米国で売ったアンリ・ペルゴ社製だが、日本向けには中上のような様式が生まれた。右上/左から、アンベールの甥と言われるJ・コロンの商館が1898年頃に輸入したオメガ製、シーベル・ブレンワルド商会が1885年頃に輸入したボーレル・クルボアジェ製、1896年頃に輸入されたオメガ製の時計。下/左は、ファブル・ブラントが輸入し大好評を博したエドワール・ファブル・ペレ製の時計。その後、1877年頃にはリュウズ巻き式のロンジン製時計(右)、1897年頃には薄型のゼニス製時計(中上)が輸入された。撮影協力および時計解説：大川 展功

条約締結によってスタートを切った両国の関係は、今日に至るスイス時計産業の発展にも大きく寄与した。

2024年2月6日に国交樹立160周年を迎えた日本とスイス。それはスイスにおける重要な産業である時計産業がつないだ“国交”とも言えるだろう。従って、特命全権公使として来日し、見事に調印に漕ぎ着けたアンベールの功績は、高く評価されるべきである。スイス時計を日本に輸出するための門戸を開いたエメ・アンベールと、その使節団のメンバーに今一度敬意を表したい。

統計から読み取れる 2つの事象

1. 日本では1873(明治6)年1月1日から、太陽暦を採用する改暦が行われた。この年の置き時計および掛け時計の輸入数量と金額は大幅に増加し、前年比で数量は420%、金額は277%にまで一気に上昇している。従って、この数字からも明治の改暦が時計の輸入を引き上げる一因であったことが窺える。(東洋経済新報社『日本貿易精覧』資料より)
2. わが国における基本的な貿易統計としては、大蔵省が1882(明治15)年以降編纂を行った『大日本外国貿易年表』がある。この資料によると、同年の袂時計(=懐中時計)のスイスからの輸入数量は2万9819個、輸入金額は15万5042円であった。日瑞通商修好条約から18年後、わが国の袂時計の輸入は9割以上をスイスが占めていたが、これは国交樹立の立役者となったエメ・アンベールの功績といえるだろう。



スイス時計協会 FHのご紹介

Fédération de l'industrie horlogère suisse FH

スイス時計協会FHは、スイス時計業界の保護と発展を目的とした組織で、スイス・ビエンヌ(本部)、香港、東京に事業所を設置して運営しています。腕時計、置き時計、時計部品の生産および販売に従事するスイス企業の9割以上、約500社が加盟しており、会員の法的な利益を守るための活動を行っております。東京事務所は主に情報センターとしての役割を担っています。



日本市場の調査および報告

- 日本の情勢(政治・経済)、時計市場の調査結果をスイス本部へ報告(年4回)
- 消費者意識調査の実施(2年毎)

会員向けサポート業務

- スイス時計のアフターサービス代行
- 日本への輸出を希望するスイス時計メーカーのサポート
- 日本における偽造品対策の推進
- セミナーの開催や時計業界内の交流の場を提供

広報活動

- ウェブサイトやSNSによる加入ブランドの新製品情報等の発信(www.fhs.jp)
- スイス時計の輸入統計資料の作成、および配信
- 小売店、修理店、エンドユーザーに対する情報提供サービス
- スイス時計の魅力を伝える watch.swissプロジェクトの運営

watch.swiss ジャパン公式インスタグラム



スイス・メイドについて

スイス・メイドと表記される時計は、原産地が保障されている数少ない工業製品のひとつです。スイス製の時計は高い技術や品質、独自の付加価値を持っています。さらにスイス・メイドと記されている腕時計には、法律により定められた基準を満たしているという信頼が加わります。



偽造品対策について

スイスが製造する腕時計は年間2000万個前後ですが、毎年それ以上の偽造品が作られています。この偽造品はブランドの知的財産を奪うだけでなく、消費者にも害を及ぼします。偽造品を排除するための啓蒙活動は、スイス時計協会の重要な役割のひとつです。

